

La vie du Sénégal

Spécial. 2



今回は主にセネガルでの私の活動やセネガルの女子サッカーについて紹介できたらと思います。日本と遠く離れたセネガルでは日本とどんな違いがあるのか、アフリカサッカーのこれからについてなど、皆さんに少しでもお届けできたら嬉しいです。

当方はセネガルサッカー協会に所属して、主に女子サッカーナショナルチームのコーチとして、2020年夏に開催予定であったアフリカ選手権優勝を目指して日々、活動していました。2022年に開催予定であったアフリカ初のダカールユースオリンピックに向けても、若手選手の育成・発掘にあたっていました。（当方の紹介やセネガルに渡った経緯は前回の記事を御覧ください。）セネガルの国民的スポーツであるサッカーを、アジア人が指導する。尚且つ、国を背負って戦う選手を外国人が教えると言うことは簡単ではありません。渡航する前から、受け入れてもらうには時間がかかることも分かっていたし、選手時代の経験も加味して、自分の良さを出せたらいいと思っていました。しかし、私が思っていたよりもその壁は高く、日本人へのサッカーレベルの偏見や印象、世界での立ち位置、1人のサッカーコーチとして非常に多くのことを感じたのを思い出します。セネガルは長い年月、フランスの植民地だったこともあり、アジアのサッカーから技術を学ぶと言うよりは、古くからヨーロッパのサッカーを牽引してきたフランスとつながりがありました。そういった状況の中、日本人の勤勉さ、チームスピリット、近年、著しい進化を遂げている日本サッカーの技術を落とし込んで欲しい、とのことで招聘していただいたことは感謝の気持ちしかありません。

セネガル（女子）サッカーの現状と課題

1

伝統文化

2

環境

3

育成年代

“なぜ”



1. セネガルでは国民的スポーツであるサッカーも実は男子に限った話です。小学生から体育の環境でほとんどの男子生徒がサッカーに触れ合うのに対して、女性はその機会すらありません。サッカーは男子が行うスポーツという風潮が強く残り、将来は女性が家事や料理で男性を支える、と言う文化も未だ根付いています。また、若くして結婚をし、たくさんの子どもを生むのが “普通” とされているセネガルでは、結婚適齢期をサッカーに捧げ、家族を作らずにサッカーに打ち込むというのはレアケースそのものです。（代表選手全員が未婚。2020年招集メンバー）

2. アフリカのイメージを浮かべると、ジャングルや自然豊かな場所に動物が我々と共存している、そんな絵を浮かべる人もいるかと思いますが、サッカー環境に関しても年代に適した環境があるとは言えません。

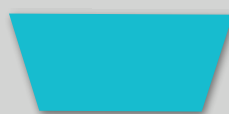
プロ：多少整備された芝生や、人工芝での練習が基本。メーカーとスポンサー契約をしている選手も少ない。（女子サッカー選手の社会的地位）

アマチュア：砂利や落ちていたゴミが混ざった凸凹のグラウンド（四角形でなく台形や三角形に近いようなところでも練習をしている）で、ボールの質も良くない。

3. 日本ではプロは勿論、今や育成年代の高校でさえも人工芝を完備した素晴らしい環境でサッカーをしているところも少なくありません。代表選手のような特別な存在だけでなく、ピラミッドの底辺から頂点まで、できるだけ良い環境でプレーして欲しいという考えのもとです。しかし、セネガルでは資金的な問題もありますが、代表選手には常に手厚いサポートを心がけ、「あそこにたどり着けば家族を救える。サッカーで生活できる」といった選手の考えもあるため、育成年代にお金をかけることは日本に比べて少ないように思います。（代表レベルの選手は日本同等の待遇 or それ以上） こうして大きく差別化をすることで、上手くなればあんなに良い環境でプレーできるんだ、と選手をモチベートさせる意味もここに込められているという。

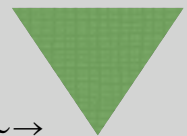
環境ピラミッド 【日本】 トップ→

小学生～→



【セネガル】 トップ→

小学生～→



アフリカサッカーのこれから～

FIFAワールドカップでの優勝こそないものの、近年アフリカの代表選手たちは世界のトップクラスのリーグで、数多くの選手が活躍しています。しかし、そのほとんどの選手が若くして母国を出て、欧州でサッカーに打ち込んだケースです。これからもう1ランクステップアップするためには、育成年代の環境整備や指導者の育成、スター選手の発掘などが挙げられている。根強く残る文化や風潮を超えて、発展途上国とも言われるアフリカの国が、スポーツを通じて世界で輝く日もそう遠くないと私は感じています。

